

現代日本小説大系

其

之

其

之

日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第四十二卷

河出書房版

現代理日本小說大系 第十四卷

昭和二十五年十月十五日 初版發行
昭和二十七年十二月二十日 再版發行

定價 貳百參拾圓
地方定價 貳百四拾圓

著者代表 德 永 直

發行者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河 出 孝 雄

編集者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會
中 野 重 治

印刷者 東京都千代田區神田神保町三丁目二十五
大 沼 正 吉

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八 株式會社

河 出 書 房
電話 神田橫三一七四番



目次

徳永直

太陽のない街

三

佐多稲子

キヤラメル工場から

一五一

橋本英吉

金融資本の一断面

一六三

岩藤雪夫

ガトフ・フセグダア

一七三

加賀耿二

綿

二〇元

平林たい子

施療室にて

二六〇

毆

る

二七五

解説(中野重治)

二九五

徳永直

太陽のない街

街

1 ビ ラ

電車が停つた。自動車も停つた。——自轉車も、トラックも、サイドカーも、まつしぐらに飛んで來ては、次から、次へと繋がつて停つた。

——どうした？

——何だ、何が起つたんだ？

密集した人々の、至極單純な顔と顔を、黄色つばい十月の太陽が、ひどい砂埃りの中から、粗つぽくつまみ出してゐた。

人波は、水溜りのお玉じやくしの群のやうに、後から後から押して來ては揺れうごいた。

——御通過だ——攝政宮殿下の高師行啓だ！

最前列の囁きは、一瞬の間に、後方へ擴がつて行つた。自動車は爆音をとめ、人は帽子を脱つた。

十五分あまりが經つた時、最前列にゐたものは金ビカの警部と、増列した警官の擧手の間を五臺の自動車が、フキルムの影のやうに音もなく走り去るのを見た。漆黒の幌に菊花の

紋が一つ輝いて埃りつばい光線の中に、キラリと群集の眼を射た。しかし、後方のものには警官の帽子が見えただけであつた。

遮斷線が解かれた。

人波が、堰を弾ちいて、流れだした。その時、

——痛えッ、コン畜生ッ、氣を付けろッ！

流れに揉まれてゐたモデリを着た男が、飛び上るやうに叫んだ。黄色いレインコートを着た男が突然彼の胸にぶつつかつたからである。

——何しやがるんない。——同じやうにぶつつかられた二、三人が一度に叫んだ。モデリは、屈強な腕をのばして、この亂暴な洋服男の、レインコートの端をつかんだ。

——そいつを捕へろ！

しかし、レインコートは、つかまれながら、群集の肩越しに右腕をつき出して、さう叫んだ。

——そいつを捕へろ！彼は叫びながら群集の中を泳いで、前の方につき進まうとした。その瞬間——ヒラヒラと、三尺あまりの高さに、サツと舞ひあがつた、まつ白な紙片が、ひらひらと頭の上に落ちて來るのを群集は見た。

——そいつだ！その絆纏はんてんを捕へろ！！

刑事らしい男はまた叫んだ。足を踏まれたモデリは、びつ

くりして手を離した。が今度は眼の前にとび出して來た制服
巡查が、したゝか彼を蹴飛ばした。彼は氣が付いたやうに怒
鳴った。

泥棒だッ!

人波は、めちやくちやに混亂した。倒れた自轉車の上に、
のめつたトンビが折り重なつた。

——スリだ!

——さうぢやねえ、社會主義者だ!

制服や、私服が、群集を突き飛ばしながら、犯人を押へよ
うと跳び廻つた。が、どこにもぐつたのか肝腎の絆纏姿はも
う居なかつた。

——ビラをあげたかね、さつきあいつが撒いて行つた……。
レインコートは、息を切らしながら、制服に聞いた。

——見えますが……

——そんなことはない、馬鹿な——

彼は不興氣に首をふつて、うしろをむかうとした。

——アッ、それだ!!

突つ轉がされた老婆が、地べたに落ちてゐた紙片で、泥に
なつた前襟を拭かうとしてゐるのであつた。

——これぢやないか? これだ!

キョトンとした老婆の周圍に、群集が寄つて來た。私服

は、ビラを老婆の手からふんどくつた。

親愛なる小石川區民諸君!!

並に東京市民諸君に懇ふ!!

吾々大同印刷會社従業員三千、家族一萬五千人の
争議團は、横暴なる大資本家大川社長の奸策に據
つて、鑄造課三十八名の骸首を名とし、吾々の組
合出版労働を根本より打ち碎き一萬五千の糊口を
飢饉に陥れんとする惡辣なる魔手に對抗して、既
に五十餘日を闘つて來た。吾々の所屬する全日本
労働組合評議會及び全國の労働者團體より熱誠な
る支持應援を得て、飽くなき大資本閥大川と闘ひ、
全日本無産階級の最前線に於ける吾々の牙城を一
歩も退かしめざるべく、必勝を期してゐるもので
ある。

親愛なる小石川區民諸君!!

並に東京市民諸君!!

諸君は、賢明なる諸君は必ずや吾々争議團の正義
に味方されるものと信ずる。個人の利得に因つて、
一萬五千の糊口を窮地に陥れ、延いて小石川區内、

白山御殿、久堅、戸崎の各町の商人諸君をまで困乏に追ひ込み、凡ゆる悲惨事を生ぜしめても恬として省みざる彼大川の貪慾を憎惡排撃される者と信する。

吾々は正義の名に於て懇ふ。

諸君の支持應援と、また諸君の輿論に於て、この不徳漢を葬り、吾々爭議團の勝利に盡力せられんことを！

一九二六年十月十日

大同印刷爭議團
小石川區民有志

私服の眼は、梢上の小鳥のやうに、活字と活字の間を飛んだ。

——これだッ！

制服に、何か囁くと、彼はすぐ、左側の商店へ入つて行つて、自動車を引き張り出すと何處かへ消えた。

自動車がラッパを鳴らした。電車が動き出した。しかし、群集は、小學生が使つたケシ護謨の痕のやうに、まだ小汚なく、十字路のあちこちに落ち散つてゐた。そして不安さうに

さゝやき合つた。

——きつと、何かあつたんだぜ。

ビラ一枚に、あんな騒ぎは不當であつた。群集は、交通整理や、制服に追ひ散らされながら、それでも、商店の軒下、ボストの蔭などに、好奇的にへばりついた。

——來た、來た！

急短な爆音を立て、サイドカーが疾走つて來た。サアベルを杖にした署長がのつてゐた。

サイドカーは、緩いカーヴを描きながら、現場を一周した。やがて一人の制服が、署長の面前に擧手の禮をした。署長は、口早に何か命じた。サイドカーは、そのまゝ電車通りから約一丁、正門まで砂利を敷き詰めた、東京高師の、構内へ消えて行つた。

十分も経たないうちに、二十名あまりの制服が、駆足でやつて來た。そして現場から高師正門までまるで寫眞のやうな無表情さと正確さで、ズツと立ち並んだ。

2 上と下

攝政宮殿下は、御機嫌であつた。

滿庭の生徒一同へ、設への御座所より、御挨拶遊ばされたとき、謹嚴な老校長は、あぶなく涙が滾れさうであつた。

秋の陽は晴れてゐた。殿下は御先導申上ぐる老校長の後から、記念の御手植を遊ばさるべく、校内の前庭へ歩を運ばれた。

自然の丘陵を均し、潤い大池を中心にした前庭は、鬱蒼とした樹木に圍まれてゐた。檜、柏、松、杉等の大木が、昔の儘の山の名残を見せて、枝を交へてゐる——迎賓橋は水のな

い溪谷に架けられたものであつた。
随伴のシルクハットや、長剣を佩びた武官やが、瀟洒なモ
ーニング姿の殿下の後に随つて迎賓橋の半ばまで、歩いて來
た。

殿下は足を停めさせられた。老校長は、びくりとして殿下
を仰いだ。後にゐた事務官が、心得顔に校長にいつた。

——いゝ景色です。……東京市内に、こんな絶景があらう
とは全く意外です。

まつたく！ 迎賓橋上から、東南を眺めた景色は、確かに殿
下の御足を停めさせ奉るものがあつた。足下から、駆け下り
た森林は、たゞ一色の枝葉を差し違へたまゝ、また向うの山
まで一息に駆け上つてゐる。紺紫のつばさに銀白の腹部を、
チラと覗かせた巨大なつばくらが一翺りに翔つたやうに。

——向うは、昔、幕府時代には、白山御殿と云ひまして、
徳川公の御殿跡であります。尤も、別荘と云つたものであり

ませう。それから右へ、細川公の下屋敷、阿部侯の上屋敷等
があつたところと、承知して居ります。

随伴の人々は、動いてゆく老校長の指の方向を、呆氣にと
られて見惚れた。

——それから少し下つて、山腹ともいふべきあの森林が、
植物園でありまして、昔は徳川公の藥草園、眞向ひになる、
此方の山は、本校構内に連なつて右へ、松平公一門の上屋敷
跡で、現在でも通稱、清水谷と申して居ります。

殿下は、興味深さうに聴いてゐられたが、フト校長へ言葉
をかけられた。

——向うの山と、此方の山との間に、谷がある譯だが……
見たいものぢや。

——ハッ。
と云つたが、老校長は恐縮してしまつた。白髪、顚頂部
まで禿げ上つた額へ、そつと手を當てゝから、思ひ切つたや
うに、申しあげた。

——え、以前は千川上水と申しまして、立派な溪谷の形態
を保ち川も綺麗でありましたが、現在は田圃や、河ふちを埋
めたてまして、工場も出来、町も四つ程出来まして、三、四
萬の町民が生活いたして居ります。

シルクハットが駭いた。

——ホウ？ あの森の間にですか、ホウ？

軍服達も、ビツクリした。職掌柄、望遠鏡でもあつたら、その森の間に、それほど空間があるかどうかを見たであらうが……肉眼では、とても、想像すら不可能だつた。

しかし幸ひに、殿下は、それだけの御下問で、足を移させられた。老校長はホツとした。

さうした世事には、比較的疎^{うす}い勅任官從四位の老校長と雖も、あのやつと一平方哩にも足りない谷底に、東京隨一の貧民宿トンネル長屋があり、十數年前の千川上水が、現在では、あらゆる汚物を呑んで、梅雨期と秋の霖雨には、定つて氾濫しては、四萬の町民を天井へ吊し寢床を造らせてゐる。千川改修問題が、市會議員や區會議員の立候補の演説材料にはなつても、市會の議題には上らないで、今春も町内の娘子軍が、市廳へ押し寄せて示威運動をやつたことも知つてゐた。況して、四ヶ町の勞働者、小商人の生死の浮沈となつてゐる、目の大同印刷爭議が、日々に悪化し、豫期し得ざる危険が、今夜にも勃發しないとも限らない現状を、彼老校長と雖も知らざるを得なかつたからだ。

太陽は、山から山へかくれんぼした。

「谷底の街」は事實「太陽のない街」であつた。

千川どぶは、すっかり舊態を失つて、無數の地べたにへば

りついたやうなトンネル長屋の突出に、押し至められて、臺所の下を潜り、便所を繞り、塵埃と、コークスのカラと、空瓶や、襤褸や、紙屑で川幅を失ひ、洪水に依つて、やつとその存在を示してゐるに過ぎなかつた。

その千川どぶが、この「谷底の街」の中心であるやうに、それから距たり、丘陵に沿うて上るほど二階建もあり、やゝ裕福な町民が住んでゐた。それは、洪水を避け、太陽に近づくことであり、生活の高級さを示すバロメータアのやうなものであつた。役付職工、事務員等は松平といふ華族と門を並べてゐる大川社長の邸宅が、山の頂邊にある事等から押しても、ごく自然なことゝ考へてゐた。

大同印刷會社は、街の中心に在つた。そしてその裏門から通ずる三間幅の道路は、丘陵の傾斜面とトンネル長屋との間を縦斷して、唯一の表通りとなつてゐた。

小商人達は、その表通りへ並んでゐた。一膳めしや、酒場、魚屋、呉服屋、雜貨店、藥屋、酒屋、等等等……

魚屋も、八百屋も、市場への買出しには朝早くは出掛けなかつた。午前中の魚河岸で、青物市場でこのトンネル長屋に向く、魚や野菜はなかつたからだ。彼等小商人達は、需要者のコツと、懷中加減をよく知つてゐた。

職工達は、晝間と夜間の半分を、工場の板の間で過し、夜

のホンの一時間ばかりのうちに、一日の享樂を食らなければならなかつた。飯を食ひ、酒場でアクどい酒を呷りつけ、錢湯の中で醉を醒醒さすことが、最も順調な一日であつた。

太陽の目の通らない六疊一間に、五人も六人もの家族が寢起した。妹が嫁にゆき、弟が片付くしなければ、兄は三十になつても嫁を貰へなかつた。

——だつて、お前、一々夜半に眼を覺まさせるのは罪だからな——。

しかし、笑つて出来る話ではなかつた。彼等男女は、殆んど工場で知り合ひ、彼等の多くは「工場の戀」であつた。だが、争議が始まつてから以來、彼等は、お互がひどく變つた自分達を發見した。顔色が青ざめて、しなびてゐた。工場のお互は元氣があり綺麗に見えた。作業服の上つ張りに、白い前垂を當てた様子も、労働服の上着を脱いでシャツ一枚の姿も、ひどく頼もしく思へたのだつた。

しかし、そのすぐはない、疲れたやうな、すぐ怒鳴り出しさうな顔色は、彼等若い男女ばかりではなかつた。氣むづかしく傲然と、がらんだりの辭に威張つたやうな工場の煉瓦の建物を取り巻く、この「太陽のない街」全體がさうだつた。

表通りの小商人達も、長屋の娼達も、子供の小遣で食つてゐるしんこ細工やも、飴賣の婆さんも……凡てがさうだつた。

彼等は咽喉佛のところ、何か、絡まりついてゐて、ひどく性急になつてゐた。彼等は咽喉佛のところに何が絡んでゐるかは判らないが。

——糞ッ、やつちまへッ！

と、怒鳴り出したい憤りが、すぐ顔に出た。

3 住 民

——だからね、お爺さん、姉さんが歸つて來てから、相談なさいよ。妾には、とてもそんなこと……

お加代は受太刀になつてゐる。それで姉の高校が歸つて來たら……といふのだ。お加代は内氣なだけに、姉ほどに病父を云ひ負かすことは出来ないものの、この争議を裏切るなんてことは思ひもよらないことだつたが、顔色變へて威嚇かしにり、口説いたりする父親の前では、つい姉を引合に出して了ふのである。それほど、姉は、父親にききめがあるのだつた。

——駄目だ。あんな狂人に、何を云つたつてわかるもんか……なアお加代。

病人は、寒さに沁みる關節の疼痛を、顔色にまで現はして、藥罐を持つて起たりとするお加代を、また眼で坐らせた——。

——お前までが、近頃は、二言目には、裏切だとか何とか

云ふが……そんなことアねえ。

病父は、執拗だつた。彼は是非お加代を、工場へ入れなければならぬと思つた。彼は恩人（彼は恩人と考へてゐる）である職長の吉田に、約束したことを果さねばならなかつた。

——俺達、親子は、あの會社には深けえ恩があるんだ、死んだ母親だつてさうだし、お前等だつて、會社の飯で、今まで育つて來てんだぞ。

お加代は、他の事を考へてゐた。はやく夕飯の支度をしておかなければならぬ。行商隊で、さんざ歩き廻つてゐる姉が、もう歸つて來る時分だつた。

——ナア……事によれば、高枝の奴、勘當したつて構はねえ……お前が承知すりや、表通りの吉田さんが、爭議團に知れねえやうに明日でも迎へに來てくれる。え？

彼女は、びつくりして顔をあげた。

——飛んでもない！

探るやうな、病父の眼ざしが……彼女を、親子としての愛着をさへ、失はせてしまつた。

——お父さん、吉田さんと約束したのね……さうでせう？
お加代は、浮腰になつて、父の眼をキツと見返した。少女らしい豊かな頬が、青ざめてゐる。

——ぢや、お前、いやだつてえのか！

病人は、半ば起しかけた身體を伸ばして、お加代の着物の前襟を掴まうとした。

彼女は、怯えて後ずさりしながら、フト、何時の間にか、歸つて來た高枝の姿を見て喜んだ。

——どうしたの？ 加代ちゃんが喧嘩するなんて、えらくなつたわね。

高枝は、笑ひながら、足袋の埃りを拂つて上つて來た。

病人も、ギクツとした。しかし、今日は何時もと違つて、すぐ退却しさうな氣勢を見せなかつた。

高枝に移した眼は、いまにも飛びつきさうだつた。

——とても、外方はひどい風よ……ア、草臥れちやつた……

彼女は、べつたりと坐り込みながら、快活な調子で、

——トンネル長屋と雖も、たしかに、外方よりは暖かいだけ、家賃十二圓五十錢也の値打があるわけだわね。

高枝は、丸きり親子喧嘩を眼中においてゐなかつた。

——加代ちゃん、濟みませんが、お腹が空いて動けないから、御飯をね……

お加代は、それを機會に、立ち上らうとした。
——坐つとれッ……

噛みつくやうに、病父が怒鳴つた。お加代は、もちもちし

た。

——どうしたのさ？　いつたい？

病父も正面から訊かれては、一寸つぎ穂がなかつた。

——え？　加代ちゃん、馬鹿に憎けてるぢやないの？

三つちがひの姉でありながら、お加代にとつては母代りの姉であつた。

——きつと、また、お父さんが、いつもの世迷言始めたんだらう。いゝよ、いゝよ、ナアニ、精神に異狀ありと思つてりや腹は立たないよ。

お加代も、思はずクスリと、可笑しさが、口許へ浮いて來た。

——ナニ？　この狂人阿女！^{きちがひあま}　汝こそ狂人だ、親を馬鹿にしやがつて！^{てめえ}

病人は、左手で枕許にあつた湯呑茶碗をとると、いきなり投げつけた。茶碗は、高枝の小びんに當つて、背後へ落ちた。

——お、痛い。

彼女は、片手で押へたが、別に腹もたてなかつた。

——お父さん、妾、何も親を馬鹿には決してしないわ——だから、お父さんも、子供を馬鹿にしないでね。

お加代は、流し元へ行つて、夕飯の支度を始めた。高枝は、行商隊用の石鹼や、萬年筆を入れたズツクを片付けながら、

——ね、お父さん、お父さんは、二口目には、狂人阿女つて怒鳴るけど、そりやお父さんが間違つてるわ、お父さんが……會社の先々代喜兵衛さん時代に可愛がられて、斷截機で手首を失くしてしまつた時代とは、いまは、まるきり違ふんだわ。

高枝は、小びんの痛みをさすりながら、おだやかに云つた。

——お父さんから見れば、妾達は狂人か知れないけれど、妾達から云ふと、お父さんは全く精神に異狀ありと云ひたくなるのよ。

病人はそつぽ向いてしまつた。

電燈が點いた——。

お加代は、小さいちやぶ臺を病人の横に運んで來た。

何時もなら電燈の點く頃は、會社の鐘が鳴りひびき、稼ぎ手が歸つて來るこのトンネル長屋は、一齊に騒々しくなり、赤ん坊や女房達が、追ひ込まれたばかりの豚小舎のやうに賑やかに騒々しくなるのだが、この頃はゼンマイの毀れたボンボン時計のやうにとつっきの悪い空氣につままれて、日が明け暮れしてゐた——。

——賣れた？

病人へ食物を當てがつてから、お加代は姉と向ひ合つて箸をとつた。

——大したこともないわ、だけれどね、近頃は皆、平均に賣上げるわ、馴れちやつたんだネ。

——だつたら骸首になつたら、製本女工なんか止しちまつて、行商人になるといゝわ、五六人一緒に組んで！

——そして唄を歌つて、太鼓たゝいたらそつくりだね。

——ナニにさ？

——孤兒院の生徒に！

二人が一緒に失笑した。お加代はすぐ笑ひが止らなかつた。笹の葉が動いても、可笑しい十八の彼女であつた。

色白で、眼鼻立の整つた、日毎に美しくなるやうなお加代を、

……この娘は、幸福にしてやりたい——。

と高枝は思ふのだつた。

彼女は不圖、思ひ出して、

——今日ね、宮池さん達に逢つたわ。

——何處で？

お加代は、顔をあげてきゝかへした。

——本郷の動坂で……四五人連れ立つてたわ。萩村さんなども居た、他の人は一々知らないけれど、皆特務班の人らしくつたわ。

——さう、あの人達は、いつたい何してんでせう？

お加代には、特務班の性質が判らなかつた。

——妾にも、よくわかんないわ、特務班は何もかも、絶対に秘密だからネ。

——怖いことをやるんぢやないかしらん？

お加代は、姉は知つてると思つた。

——わかんないね、幹部同志だつて知らないでせう、またわかつたつて團の秘密なら云へないぢやないの——

彼女は、すぐ調子を變へて、

——そんときね、宮池さんが、あんたのことを訊いたのよ。——

——まア。

お加代は、顔を赧らめた。

——そしたらね、他の人達に、ひやかされちやつて宮池さんひどい目に逢つてたわ。

高枝は以前から、宮池とお加代の戀仲を知つてるだけに、姉らしい氣持で、かるい嫉妬に似た氣持も交へながら、團員の噂にも上るほどの、好一對の戀愛の行末に、何となく不安を感じてゐた。

二人はいつか黙つて夕飯を終つた。

二人はいつか黙つて夕飯を終つた。

まだ怒つてゐる父親を残して、二人は錢湯へ行つた。高枝は自分自身に、妹の事毎の動作に浮き浮きした調子や、念入りに化粧する鏡の前の後姿などに、一々探索するやうな氣持

があることを不快に思つた。

——自分も、宮池に、戀を感じてゐる——

それを、意識することは、嫌だつた。彼女は先にたつて、お湯を出てしまつた。

千川橋の上に、近所の若者が五、六人集まつてゐた。もう橋の上では、寒い氣候でも、彼等の集合する空間は、こゝきりしかなかつた。

——ヨウ、高ちゃん、お湯か。

黄色いセーラーのズボンを穿いた労働服が、小生意氣に帽子のつばを反らして、高枝に聲をかけた。

——誰だい？ ナアんだ、慶公か、餓鬼のくせに生意氣ね。

彼女は、差し出したセーラーズボンの手を握つてから、グイと手を伸ばして、帽子をヒンめくつた。

——おい、おい、高ちゃん。どぶウ投り込んだちや駄目だよ、おい——。

慶公は、唇を反らして周章てた。他の連中が、手を叩いて喜んだ。

——いゝぢやないの、こんな小汚い帽子、女こさへんだつたら、モツといゝのを買つといでよ。

高枝は、この小生意氣な十七ばかりの少年を、からかふのが、ひどく愉快だつた。慶公は、高枝の腕に飛びついて來た。

——ナニ、腕づく、よし來い！

高枝は、慶公の首つ玉に兩手をかけて、グイグイ押しまくつた、笑つてゐた他の若い者が今度は、

——慶公うまくやつてやがんな。

と云ひ出した。二の腕までまくれて、彼女の腕が、宵闇の上になく動いた。

——今晚は、皆さん。

お加代が追つついて來た。

——ヤア、随分美しくめかしたね、ちよつと握手——帯を尻の上に結んだのが、近寄つた。

——マア、いやらしい三ちゃんね……いやよ、お止しなさいつてば……。

お加代は、振り拂つて、ぼんやりハアモニカを口へ當て、眺めてゐる喜イ公の傍へ行つた。低能の喜イ公は、ニタニタした。

——何か、吹いて頂戴よ……キヤラバンでもいゝわ。

喜イ公は、反ッ齒を白く光らせながら熱心に吹きはじめた。

——駄目、駄目……赤旗がいゝわ、赤旗……

高枝が、慶公の首ッ玉を、小脇にかい抱くやうにして近づいて行つた。

——いゝね、赤旗の歌。

彼等も、所屬こそ違へ同じ爭議團であつた。

黒い千川どぶの水が、少しづつ川の方へ動いて行つた。陶器のかけらや、魚の頭などがしろく光つた。

空には、鎌の形をした下弦の月が、中空に舞臺のバックのやうに、釘付けになつてゐた。

——民衆の旗、赤旗は——

低く、廣く、だんだんに盛りあがつてゆく皆の揃つた唄聲のやうに、幾百幾千の長屋がどんなに壓へられてもつと低く、もつと低く、おしだまつて、闇底にうづくまつてゐた。

その長屋の、數列がつきるところに、お伽噺に出て来る、鹽の城のやうな陳瓦の建物が、彼等の睨んでゐる、獸聲をたたきつけてゐた焦點だつた。

——卑怯者去らば去れ——。

橋上の男女は、次第に聲に熱を帯び、手を振り、足踏みをしながら、橋板を蹴つた。

喜イ公は、涎を垂らしながら、懸命に吹き鳴らした。

對峙する陣營

1 爭議團運動會

『未曾有の大爭議となつた小石川區久堅町大同印刷會社爭議

は、未だ何ら解決の曙光を見ず既に工場閉鎖以來五十日を經過したが従業員三千の爭議團側は結束固く、日本勞働組合評議會は全國の所屬組合より資金の寄附を募り、大阪及び北海道方面應援の闘士は、其筋の警戒網を潜つて、續々入京しつゝある模様である。……會社側も第一回の交渉決裂以來、方針を變へ腰をすゑて飽迄左翼組合員の排除を目的としてゐるものゝ如く……是等に因つて多大の影響を被るのは、附近各町の小商人達であつて、大同印刷爭議は延いて、各町内の繁榮に打撃を與へ、同區内有志達は、寄々協議し、輿論に訴へて、何等かの對策を講ぜねばならぬ成行になつてゐる。

……』

東京日も、朝日も、讀賣も、報知も、東毎も、全東京市のすべての新聞が、かうした同じやうな記事を掲載した。

しかし、市民は繁忙であつた。彼等は、この未曾有の大爭議が、殆んど二三日毎に、大きな活字で彼等の眼前に出現しても、それを一々腦裡にをさめることはできなかつたからだ。

國會議員の選舉經過、政府與黨の動搖、不安な赤いシグナルを宛けて突進してゐるやうな、經濟界の變動、等、等、等。

善良なる東京市民が、若し健忘症でなかつたら狂人になつたであらう。彼等は幸ひにも、電車内に置き忘れた新聞と同